

教育現場で、学生主体の「協同労働」の芽生え

- - NPO法人長野大学ボランティアセンター「ふらっと」の活動から - -

田中夏子（長野大学）

1. 二つのシーンから…

<シーン1>長野県長野市の西部に接する人口3000弱の村、中条。山間に位置し、まとまった平地に恵まれない地だが、一面、見事な棚田が広がる。その棚田の一角で餅米づくり挑戦した学生集団がある。「挑戦」といっても、農業には誰もが素人で、田圃に足を踏み入れるにも逡巡している様子。作業はなかなか進まず、指導と応援にあたる村の人々の、合理的な手早さに学生たちは驚嘆の声を上げる。

以上は、65歳以上人口が4割にせまるこの静かな村の人々と、「NPO法人長野大学ボランティアセンターふらっと」メンバーとの交流の様相である。「ふらっと」では、長野県長寿開発センターの世代間交流事業を導入し、昨年来、村と大学キャンパスとの人々の行き来を数回にわたって企画・運営してきた。当初、行政の事業としての「交流」に疑問や抵抗を感じる学生もいたようだが、回を重ねるうちに、双方の遠慮もなくなり本音がかいま見られるような絆ができてきたという。

<シーン2>ゼミナール教室の一角。これからグループ討議が始まるころだ。聴覚に障害をもつ学生T君の傍らに、Kさんが座る。T君の視界に入りやすい位置にノートをおきながら、発言者の言葉を素早く書き取っていく。T君は話し手の唇とノートに交互に目をやりな

がら、議論の流れを追っていく。

Kさんは、昨春、大学と「NPO法人ふらっと」との共催で行われたノートテーカー養成講座を受講して一通りの技術を身につけた上で、ボランティア登録をし、聴覚に障害を持つ学生の情報保障に積極的に取り組んできた。取り組むうちに、現状の情報保障では、まだまだ不十分なのではないかという疑問が芽生え、T君やKさんたちの発案で、T君の母校である聾学校への視察ツアーや、聾学校の先生、生徒たちとの交流会などが企画されていった。

T君の受講する授業のほとんどに、Kさんのような「ノートテーカー」が存在する。授業を理解しそれを文字化する集中力と「書きっぱなし」という体力が要求されるので、本来は二人のテーカーが交替しながら速記をしていく。このノートテーカーの養成やコーディネートを請け負うのが「ふらっと」である。

2. 学生主体のNPO「ふらっと」

唐突ながら冒頭に二つのシーンを紹介した。いずれも長野大学ボランティアセンター「ふらっと」が中心となつての取り組みである。むしろこの他にも活動の幅は広い。近隣のデイサービスセンターでの常時ボランティア、集会の際の託児サービスボランティア、共同作業所でのサポートなど、昨年の依頼件数は継

続的なものも含めて103箇所、活動に従事したボランティアは82人。責任をもってボランティアを派遣するための勉強会も主催する。また昨年からは、労協ながのや高齢者生協「かがやき」とも連携し、ヘルパー2級養成講座も年二回開催。このヘルパー講座開催は、「ふらっと」の重要な事業資金源でもある。

こうした多岐にわたる事業のコーディネートを一手に引き受けているのが、高橋幹智さん。長野大学の福祉学科に在学中から「ふらっと」の設立に関わり、昨年度卒業と同時に、ボランティアセンターの常勤スタッフ兼代表となった。「大学の時、学生間で疑問が持ちあがりました。なぜこの大学は、福祉学科があるのにボランティアセンターがないのかと。また、自分の中にも、高校の時から子どもたちとのキャンプ、レクリエーション活動に取り組んできたけれど、どこか生きてないな、中途半端だなという思いがあったんです。それで、限界になった時、自分でどんな対応するのか、自分で見てみたかった・・・」(高橋さん - 田中ゼミの聞き取りから)

また、高橋さんとともにセンター設立を担った三鋸さん(前代表)は、当時の地元紙のインタビューに答えて「以前、大学の授業の実習で同世代の障害者と出会った時、若い人に友達みたいなボランティアを派遣できれば」という思いがあって、学生ボランティアの組織づくりを思いついたとしている。

こうした学生たちそれぞれの願いが集って、センター設立となったのが1999年3月。同年10月にはNPO法人を取得し、はやいテンポで組織づくりが進んでいった。学生の中心スタッフが9名、登録ボランティアは240名。また理事会構成は、代表の高橋さん他、地域住民2人、長野大学社会福祉学科の教員3人、学生7人となっている。

常勤スタッフは今のところ一名で、代表み

ずから夜勤の宿直なども引き受けつつようやく一人の生活が成り立つ。一日12時間労働で月に一、二度休めればよいほうだという。大学からの資金援助はなく、前述のヘルパー講座などから代表の人件費を自立的に稼ぎ出している。

3. 今後に向けて

学生主体の福祉NPOということで、注目が集まり依頼が集中する中で、多種多様な期待をどう整理し、優先順位をつけていくか・・・が、今の「ふらっと」にとって重要な課題だという。取材や視察も相次いだ。シーン1で紹介した交流事業の際、本来はほの暗い囲炉裏を囲んで村の人たちと静かに語り合いたいところに、取材の撮影照明で煌々と照らされる。「本末転倒だなあ」との不安と、報道を通じて地域や学生仲間に「ふらっと」の存在や事業を少しでも知ってもらいたいとの願いとの板挟みの心情だ、と話す高橋さん。発足当初と比べて知名度はあがったが、この人数と資金では、「地域の人たちの要請に応える能力がないので、あまり積極的に働きかけることができない。介護保険からもれたサービスはじめ、需要が多く存在することは、日々の電話からも痛感するのに・・・。特に移送ボランティアの人手が圧倒的に足りない」。目下、移送ができるケアワークドライバーの養成と派遣も検討中という。

地域の切実な声を日々耳にしているだけに、それに充分答えていけないもどかしさ、悔しさが、高橋さんの言葉の端々に、にじみ出てくる。それでも最後には「これからは、何から何まで自分たちでやるのではなく、地域の人たちを組織するという仕事もしていきたい」という力強い言葉で結んでくれた。